

現代的課題にどう取り組むべきか

- シンクタンクに期待すること -

開倫塾

塾長 林 明夫

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

栃木県は今、桜の花がまっ盛りですばらしい景色です。

さて、読売新聞の栃木版に「とちぎ寸言」というコラム欄があります。私は、新聞社から依頼を受け、2～3か月に1度そこに文章を書かせていただいています。4月8日の水曜日の「とちぎ寸言」に私の文章が載りましたので、今日はその内容について紹介させていただきます。

文章の題は、「新しいシンクタンクに期待する」です。本年4月中頃に、足利銀行が新しいシンクタンクを設立すると聞きましたので、そのシンクタンクに期待することを書かせていただきました。

栃木県の成長に今一番必要なものの一つは何かと言いますと、私の考えでは、他のほとんどの都道府県にあって栃木県にないもの、シンクタンクです。

シンクタンクとは、地域の経済、地域の発展、企業の成長を戦略的に政策として練り上げる研究機関のことを言います。その新しいシンクタンクを、足利銀行が4月中に設立することになりましたことは、地域経済の発展に非常に意義のあることだと考えます。

かつて栃木県には、とちぎ総合研究機構という地域に根ざした全国有数のシンクタンクがありました。このとちぎ総合研究機構は、略して「とち総研」と呼ばれ、経済の活性化と県民生活の向上のために独自のプロジェクトを組み、また、栃木県や各市町村、栃木県経済同友会などの経済団体、企業などから委託を受けて、どのようにすれば栃木県全体や各市町村、各企業の経済が成長し、発展するのか、その基礎的な研究を積み重ねました。

ですから、とちぎ総合研究機構（とち総研）は、栃木県の産業基盤を政策面で下支えした功績が極めて大きいと思います。

とち総研はしばらくお休みしていらしたので、4月に足利銀行が新しくシンクタンクを設立することになりましたことは、栃木県の地域の経済の発展にとっても意味のあることだと私は思います。

ところで栃木県の経済をリードしていたのは、特に北米やヨーロッパ向けに輸出をしていた輸出主導型の製造業です。現在、世界的な不況と超円高で、この製造業が危機的な状況に陥っています。そこで、今こそ産業界、栃木県・各市町村、栃木県内に18ある大学・短大・専門学校などの高等教育機関の3者とマスコミ、そして何よりも栃木県内で働いたり生活したりしているすべての人々が、新しい足利銀行のシンクタンクの活動に協力したほうがよいのではないかと私は考えます。

栃木県の潜在能力・可能性は限りなく大きいと私は思います。ところが、その限りなく大きい栃木県の潜在能力・可能性はなかなか顕在化しない、形となって見えてこないというもどかしさ・はがゆさは非常に大きいものがあります。そのもどかしさ・はがゆさを感じている人は、私だけではないと思います。

ですから、この足利銀行の新しいシンクタンクは、企業の人材育成のための研修、経営の支援、地域観光の振興の支援などを、まずは活動としておやりになることだと思います。そして、それらの活動を軌道に乗せることが大事であると思います。それに加えて、不況の今だからこそ、将来を見据えた本格的な調査・研究や政策の提言も是非、期待したいと思います。

では、今すぐにも取り上げるべき問題はないのかと言いますと、決してそのようなことはありません。山積みしています。例えば、道州制の問題です。県をやめて、道や州を導入するというのが道州制です。

また、地方財政の改革もあります。県には1兆円近くの負債があります。各市町村にも、予算額と同じくらいか、それ以上の負債額のところがあります。ですから、県や市町など地方の行財政はこのままでよいのか、改革しなくてよいのかということも考えなければなりません。

それから、自治体レベルの規制改革をすると経済が発展しますので、規制改革をどのように進めたらよいのかも行政の課題です。

さらに、サービス産業の生産性の向上も必要です。サービス産業は、製造業に比べて生産性が劣る、3分の2だとよく言われています。ですから、どのようにサービス産業の生産性を向上させて、製造業

から出た失業の方々を吸収するかという大テーマもあります。

農業の株式会社の参入、大変な状況にある自動車産業をどのように進化・深化させたらよいか、外国企業の日本への誘致、教育制度の改革、外国の方々に日本でどのように働いていただくか・帰化していただくか等、いろいろな問題があります。

このように、産業界には取り組んでいただきたい課題がたくさんあります。その中で何よりも取り組んでいただきたいのは、これから膨大な景気対策の予算が出てきますので、その使い途が果してこれでよいのかということを考えていただくことです。

最後に、「田舎の3年、京の3日」という言葉を紹介させていただきます。田舎で3年過ごすのは、京の都で3日過ごすのと同じであるという意味です。1つのところでどんなに懸命に物事に取り組んでも、マンネリに陥ったり、乗り越えられない壁が現れることがあります。そのようなときには、自らの力でリズムを取り戻す勇気やチャレンジ精神が必要になります。ですから、自分にとっての京の都を探して、そこに掛、知的な刺激を受けることが大事であると思います。

足利銀行が設立する新しいシンクタンクが、栃木県あるいは栃木県で働いたり生活したりする人にとっての京の都の役割を果たすことを期待したい。このような内容の文章を、4月8日(水)の読売新聞の栃木版に「とちぎ寸言」として書かせていただきました。

皆様はどのようにお考えでしょうか。

[コメント]

解決すべき課題が大きければ大きいほどシンクタンクのその果たす歴史的役割は大きい。遠慮は要らないと私は考える。来るところまで来てしまったのだから、誰に遠慮することなく本音の議論を冷静に展開すること。このことこそが地域シンクタンクに期待される。

- 2009年9月13日林明夫記 -